

「融合する文化のパターンと日本人のアイデンティティ」

(要旨)

Kozyra Agnieszka

(コズィラ・アグネシカ)

ワルシャワ大学日本学科教授

日本文化をはじめ個々の国のユニークな文化的アイデンティティの研究について、ウェルシュ・ヴォルフガング氏 (Welsch Wolfgang) の「文化的融合主義」(Transculturality) の理論の文脈でどのような意義を持つのか考察していく。

筆者の意見では、個々の国のユニークな文化的アイデンティティを疑問するウェルシュ氏の「文化的融合主義」の理論は大事ではあると考えているが、グローバリゼーションの進化があるなかでナショナリズムの機運も高まるという現象を理解するために、Bruce P. Dohrenwend, Robert J. Smith が上げた次のような文化変容パターンも考慮しなければならないだろう — 「疎外」 (alienation) ; 「再配向」 (reorientation)、「再確認」 (reaffirmation)、「再構成」 (reconstitution)。

筆者は日本を例にして、以上の四つのパターンについて論じていく。日本の歴史における異文化の創造的適応をみると、異文化の要素によって自国文化が「強化」されるという「再確認」というタイプの例が多い。なお、日本の場合、「再確認」タイプとしての「文化的融合主義」は日本文化の特徴として認識され、逆説的に文化ナショナリズムの根底をなす「文化的特殊主義」(cultural particularism) の一部となった。

各国の文化が国外の影響を受けたことを証明する場合、国民の特殊のアイデンティティを論じる意味がなくなると主張しているウェルシュ氏の立場に対して、筆者はそのアイデンティティは、社会的絆を築く大事なことであって無視してはいけなと強調したい。国民の文化的アイデンティティというのは「概念」(conceptual construct)にすぎない。各国の知識人は自分の国の文化的伝統を研究して、排外的ナショナリズムの基盤にならないような「見直された」国民の文化的アイデンティティを探るべきである。